



## シリーズ! 活躍する2022年度日本ITU協会賞奨励賞受賞者 その7

ほや  
保谷

かずひろ  
和宏

株式会社フジテレビジョン  
技術局デジタルソリューションセンター配信技術推進部 部長  
kazuhiko.hoya@fujitv.co.jp  
<https://www.fujitv.co.jp/>



超高精細映像の圧縮にHEVCコーデックを用いた番組制作や放送用映像符号化に関する勧告の審議を進め、番組交換用途を加える勧告改定に貢献。これにより放送事業者が4K/8Kコンテンツをファイルで交換する際の要求条件を国際的に示すことができ、超高精細映像の運用普及に尽力した。今後も国際標準化における活躍が期待される。

### より重要となる番組・コンテンツ制作面での標準化活動

このたびは、栄誉ある賞を賜り大変光栄に思います。ご指導・ご鞭撻をくださったITU-R SG6関係の皆様をはじめ、本事績の寄与に際しご協力いただきました関係の皆様感謝いたします。

ITU-R SG6には2019年2月より参加しており、主にWP6B（放送サービスの構成及びアクセス）とWP6C（番組制作及び品質評価）の会合に出席してまいりました。

我が国では世界に先駆け2018年より4K/8K放送が開始され、同時に番組の制作も始まりました。これを受け、国内では超高精細度テレビジョン（UHDTV）放送向けの番組交換用ファイルフォーマットが検討され、ARIB STD-B77として標準化されました。この情報を、放送用映像符号化の要求要件に関する勧告BT.1203及び放送におけるHEVCの使用に関する勧告BT.2073に反映し、番組制作や交換における相互運用性の確保を目指したのが今回の事績となります。

ARIB STD-B77策定の過程では、UHDTVに耐え得る高画質を実現するため、高いビットレートの映像におけるわずかな劣化の有無を、主観評価を通じ判定し、所要ビットレートを決定しています。こうした評価の手法はこれまで事例が無く、ARIBで検討や作業を行った方々の意図を正

確に反映し、かつ手法の適切性を説明するためのロジックや記述に腐心しました。最終的に、映像音声の品質評価のセクター間ラポータグループ（IRG-AVQA）から、内容は妥当であるとの返答を得ることができ大変安堵いたしました。

改訂された勧告は放送事業者や番組制作者に参照されることを目的としていますが、これにとどまらずコンテンツの制作・流通において幅広く参照されることを期待しております。

また、SG6では本件以外にもハイダイナミックレンジ（HDR）番組制作の指針、放送におけるAIの利用、番組制作におけるクラウドの利用、イマーシブ映像のためのハイレベルアーキテクチャなど、新しい技術を積極的に取り込む検討が進められています。このようなカバー範囲の広さもSG6の特徴であり、標準化によって相互運用性を確保してきた放送産業の伝統を体現しているように感じます。放送事業者のサービス範囲が広がり、また様々な伝送路でコンテンツを届けることができるようになる中、産業を支える標準化の重要性はより増していると言えます。今後も、微力ながら標準化を通じ産業の発展に寄与していきたいと考えております。



よしだ しんじ  
吉田 慎司

元 公益財団法人KDDI財団国際協力部  
training@kddi-foundation.or.jp  
https://www.kddi-foundation.or.jp



APT加盟国・団体の職員を対象として実施するICT技術研修の計画・運営に従事し、2017年度より5年間統括責任者を務め、延べ24か国88名の研修生に対してビザ申請対応、空港送迎、宿泊先選定などの滞在環境を相手の立場に立って準備し、研修生の技術スキル習得に尽力した。また、コロナ禍でオンライン研修を立ち上げ、円滑な実施に幅広く貢献した。

## コロナ禍により変貌を余儀なくされたAPT技術研修

この度は日本ITU協会賞奨励賞を頂き、誠にありがとうございます。日本ITU協会の皆様並びにこれまでの活動にご指導、ご協力をいただきました関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

私は2017年から2022年まで、KDDI財団の事業の柱の一つである国際協力事業のうち、主としてアジア太平洋電気通信共同体（Asia Pacific Telecommunity）が日本で開催するICT技術研修の実施受託業務に従事しました。そしてこの間、コロナ禍により研修の態様が集合研修からオンライン研修へと大きく様変わりしました。

2019年度まで実施した集合研修では、15名弱の研修生が来日し、座学の受講や関連機関への視察訪問により充実した2週間を過ごした後、その成果を各々の所属組織に持ち帰りました。研修のテーマを重層的、多面的に学べるよう、KDDIはじめ外部の講師による講義の選定や、視察訪問に要する時間等を考慮して効率的な研修日程を組むことに腐心したほか、研修生が滞在中にストレスを感じることなく研修に集中できる環境を整えました。

2020年度の研修は、研修生が来日できなくなったことにより、ハンズオンセミナーや視察訪問は実施不能となり、講義の録画をeラーニングシステム上で視聴してもらうオン

ライン形式に転換しました。研修実施後、研修生から講義ビデオを視聴するだけの研修は無味乾燥との意見があり、2021年度の研修では、研修生は疑問点をその場で質問することが、また講師は研修生の反応や理解度を見ることが可能となるよう、一部の講義をライブで実施するなどの工夫を行いました。その際、東端の参加国と西端の参加国との間には10時間近い時差があることから、両端の参加国からの研修生に少しく忍耐を強いることとなりました。

集合研修では毎日顔を合わせることから、研修生とは互いに気心が知れ、研修最終日のお別れはいつも寂しく感じました。オンライン研修の開講式や閉講式では、わずかながら研修生の顔を見、声を聞くことができ、もし彼らが来日していたらどんな雰囲気の研修になっていたのだろうかと思惟しました。

入国制限が緩和され、本年、KDDI財団は日本でハンズオンセミナーや視察訪問を行う集合研修と、在宅でのオンライン研修を組み合わせたハイブリッド研修の実施をAPTから受託しました。KDDI財団にとっては新たなチャレンジになりますが、実施経験に基づいて準備を進め、研修生やAPTから、集合研修とオンライン研修の良い点が融合した研修として高く評価されることを願っております。